



平賀源内集

全

昭和九年四月十七日印刷
昭和九年四月廿一日發行

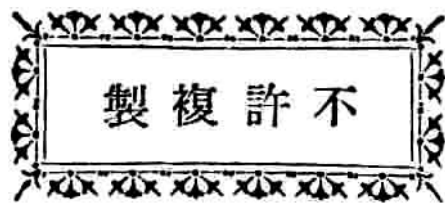
有朋堂文庫
平賀源內集
(非賣品)

編輯者
塚本哲三

印刷者兼
發行所
三浦捷一

印刷所
合資
有朋印刷社

發行所
有朋堂書店



不許複製

緒言

本書には平賀源内の述作中最も人口に膾炙せる「風來六々部集」「根南志草」「風流志道軒傳」「そしり草」「神靈矢口渡」の五篇を萃めたり。

源内は讃岐の人、幼より奇行多く、深く志を皇典と本草の學とに潛め、賀茂眞淵、田村藍水等に師事せしが、後長崎に出でて唐人館に出入し、輸入藥物の眞偽を判する傍、和蘭譯官につきて蘭語を究め、博物學上の智識を得たる事尠なからず。後去りて大阪に往き、豪商中島屋喜四郎の爲めに甘蔗の栽培を教へ、更に諸國を歴遊して寶曆中江戸に出でたり。

源内天賦の英才は向ふ所として可ならざるなく、殊に其發明的天才と科學的頭腦とは、當時全く他に其匹を見ざる所なりしかども、その説く所高遠に過ぎて世の君主に用ひられず、殊に傲岸不羈なる彼の性格は世の滔々者流と合ふ能はずして、麒麟空しく槽檻の間に老ゆるに至れり。彼や元より君子の器にあらず、我が意我が説の遂に世に容れられざるを見るや、頽然自ら棄てて酒を使ひ色に耽り、放言大語世の人士を痛罵して快しとせり。彼が文

平賀源内集 目錄

風來六々部集 前編 一—七四

放屁論……………五

放屁論後編……………三

〔追加〕……………二元

凄陰隱逸傳……………三三

阿千代之傳……………三五

蛇蛻青大通……………五

力婦傳……………六七

風來六々部集 後編 七五—一二三

吉原里のなだ卷評……………七七

飛だ噂の評……………八九

天狗髑髏鑒定縁起……………九七

飛花落葉……………一〇九—一二六

江戸男色細見序……………一二五

長枕褥合戦後序……………一二七

道行虱の妹背筋……………一二八

神靈矢口渡跋……………一三〇

嫩寮葉相生源氏後序……………一三二

きよみづもち……………一三二

風餅酒論……………一三三

矢口荒御靈新田神徳口上……………一三四

後日同口上後日……………一三五

荒御靈新田神徳後序……………一三六

木に餅の生る辨……………一三七

麥飯報條……………一三〇

〔追加〕吉原細見天の浮橋序……………一三三

菩提樹之辨……………一三七

細見嗚呼御江戸序……………一四九

根南志具佐……………一五三—一二六

前編一之卷	一五七
前編二之卷	一七三
前編三之卷	一八四
前編四之卷	一九六
前編五之卷	二〇五
後編一之卷	二二七
後編二之卷	二三二
後編三之卷	二四五
後編四之卷	二五五
後編五之卷	二六五

風流志道軒傳

二七七—三四四

卷之一	二八一
卷之二	二九三
卷之三	三〇四
卷之四	三二四
卷之五	三三七

そしり草

三四五—四六二

(一)守屋	三四五
(二)聖德太子	三四八
(三)光明皇后	三四九
(四)玄昉	三五〇
(五)弘法	三五三
六)眞濟	三五四
(七)朝觀	三五四
(八)淨藏	三五六
(九)道命	三五七
(十)業平	三五九
(十一)紫式部	三六三
(十二)神崎遊女	三六五
(十三)玄寶	三六七
(十四)遍照	三六九
(十五)喜撰	三七二

(十六)能因	三七一
(十七)日藏	三七三
(十八)慈心	三七七
(十九)賴豪	三七九
(二十)西行	三八〇
(廿一)文覺	三八三
(廿二)蓮生	三八五
(廿三)長明	三八九
(廿四)圓觀	三九二
(廿五)兼好	三九三
(廿六)賴政	三九五
(廿七)重盛	三九八
(廿八)賴朝	四〇六
(廿九)義經	四〇九
(三十)時政	四一三
(卅一)泰時	四一六
(卅二)時賴	四二三

(卅三)藤綱	四二六
(卅四)藤房	四二九
(卅五)義貞	四三四
(卅六)尊氏	四三七
(卅七)正成	四三九
(卅八)僊人	四四三
(卅九)宗論人	四四八
(四十)論語讀	四五九

神靈矢口渡

四六三—四五〇

第一	四六三
第二	四八一
第三	四九八
第四道行比翼の袖	五二三
第五	五四八

目
錄

放屁論

同

後

篇

痿陰隱逸傳

力婦傳

蛇蛻青大通

於千代傳

風來六々部集

前編

風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ其言意外に出て一家の文法古今獨歩といふべし今に至りても我人共に見んことをほりすしかるにかの集はやくより世にともしくなりもて行くまゝにこたび櫻木に彫り猶殘れる花をもあつめて六部を増補し前後四卷となし六々部集とはなりぬ

餘貨樓銅多言

風來六部集序

時に遇はざれば孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替も能い所へ乗込めば、桓公の揚詰と成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏失して、天竺浪人と成りしより、滄浪の水糝に濁醪の世の醉を醒し、吐散したる酒反吐は、酔うた浮世に廻さるゝ、醉潰共に日を明す、太平樂の巻物を、纒の本に書きつづめ、世に行はるゝ物六巻あり。頃日書林太平館、其小冊にして讀足らず、且ちよほくさと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して二巻となし、是を號けて風來六部集と題す。全く殘口が無駄書を八部せんとするには非ず、唯是會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日下界隱士天竺老人頼みもせぬに筆を採る。

おたふ男



放屁論自序

屁へてふもののある故に、への字も何とやらをかしけれど、天に霹靂へきれきあり、神に幣帛へいはくあり、鷹鷹に經緒へを有り、船に艫へさきあり、草に女青へくそかつらあり、虫に氣鬚へつひりひしあり、狐鼯鼠きつねいたちの最後屁さいごべは、一生懸命かたきふせの敵を防ぐ。人として放ひらずんば、獸けものにだも如しかざるべけんや。放ひつたり臭かいだり屁へたる君子くんしありといへば、強あながちこれを賤いやしむべからず。今評判の撒竊へつひりをさこ漢漢論ろんより證據しやうこ兩國橋。

風 來 山 人 誌

放屁論

人參呑んで縊る癡漢あれば、河豚汁喰うて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天歎命歎。又物の流行と不流行も、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善惡によるならんか。柏薙が氣どり、慶子が所作事、仲藏が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしけば、富三東都に名を顯し、川口の參詣、淺草の群集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る。或は機關、子供狂言、身ぶり聲色辻談議、今にはじめぬお江戸の繁榮、其品數へ盡しがたき中に、さいつ頃より、兩國橋の邊に放屁男出でたりとて、評議とりく町々の風説なり。それ熱惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撒るこそ持まへなれ。いかなれば彼男、昔よりいひ傳へし階子窓數珠積はいふもさらなり、礎すががき三番叟、三ツ地七艸祇園囃、犬の吠聲鷄窠、花火の響は兩國を欺き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童、はうた、めりやす、